

大阪芸術大学キャンパスにおける 芸術空間構成の実践とその研究

研究年度・期間：平成 13 年度

研究ディレクター：菅原 二郎

(美術学科 教授)

共同研究者：小田 信夫

(美術学科 教授)

齋部 哲夫

(美術学科 教授)

坪田 政彦

(美術学科 教授)

伊藤 隆

(工芸学科 教授)

田村 昭彦

(デザイン学科 教授)

加藤 隆明

(芸術計画学科 講師)

師岡 清高

(写真学科 助教授)

石井 元章

(教養課程 教授)

研究助言者：奥田 基之

(大阪芸術大学 非常勤講師)(研究家 フリー)

長尾須美子

西田 和久

(大阪芸術大学 講師)

藤井 孝宏

(大阪芸術大学 非常勤講師)

研究補助者：松村 晃泰

(大学院 非常勤助手)

尾崎 実哉

(美術学科 非常勤助手)

【はじめに】

大阪芸術大学という芸術系大学においてアートとは何か、という根源的なことについてもっと考えていく為に、そしてもっとアートに日常的に触れられるようにする為に何をしていたら良いだろうか。それを考えるためにアートステージの生まれてきたバックグラウンドを振り返ってみると、

平成 11 年度に共同研究“大阪芸術大学キャンパスにおける芸術空間構成の研究”を行い、平成 12 年度には“美術、彫刻を通しての教育環境の構成及び実践”という研究を行った。その発表をかねて“アートステージ 25”というシミュレーションによる展覧会を体育館ギャラリーにおいて開催すると同時に実験的に数点の実作品展示もキャンパスで行った。

そして平成 13 年度は、今までの試みをより実際の形で表現する“アートステージ 37”を展開しその可能性を探った。今回はこれまでの研究の中で浮かび上がった反省すべき点を反省、改善し、より明確な意識を持って表現できるよう参加者達との意思の疎通を図り、また会期中にそれぞれの作品を前にしたフォーラムを開き出品者と参加者との対話を通して何をどのように感じ、またその持つ意味などについて共に考えていけるような場を作った。年度末には、それらの記録を成果集としてまとめ、刊行した。

【現在大阪芸術大学キャンパスにあるアート作品の分布】

情報センター、図書館、ハマグチ、11 号館前広場、11 号館、体育館前広場、体育館ロビーなどに現在アート作品が設置されている。

【アートステージ 37 のコンセプトについて】

私達のキャンパスを、より魅力的な空間にしていくには、そして私たち教員を含め学生たち

の活力を、審美眼を、そして作品の質を高めていくにはどうしたら良いのか、というのが私たち共同研究グループに課せられている大きな問題と考える。

アトリエで、スタジオで、講義室で制作、理論の指導等のみならず、このキャンパスを使って学科の枠を超えた教員と学生が、より実践的な活動を通してともに学び研究していく事ができるのではないかと、というのが我々共同研究グループの、アートステージ 37 の問いかけである。

私たちが学生に対して日頃行っている制作、理論の指導、その結果として生まれてくる様々な作品を実際のキャンパス空間に置くとどのように見えるのだろうか。

それは制作の場でのそれとどのように違って見えてくるのだろうか。

そこには大きな違いがあると考えられる。制作の場では自分の作品に自信を持ち、ある意味で満足した状態のように思える。その作品を実際の空間に展示し、人に見せることにより、自分の作品を冷静な第三者の目で見ることが出来るようになる。その結果今まで見えなかった自分の力量や弱点なども自分に見えてくる。見えてくればその弱点などを克服することが出来、より大きな一歩を踏み出していけるのではないかと考える。

それらの作品に接する参加、出品していない学生達も、自分たちの仲間や指導を受けている先生達の作品故により親近感を感じ、自分の作品との比較、検討も出来、もし自分の作品がここに並んだらどうだろうか、次回は自分も参加して、というような気持ちも生まれてくるのではないかと考えられる。

自分が選び、展示した空間と作品の関係についてもより冷静な目で評価することが出来てくると考える。今回の活動の結果そこから生じる様々な問題も解決していくことが必要になってくるであろう。このような活動の実践、そして議論そのものが 14 学科の枠を超えた教員、学生の意欲、エネルギーを生み出し、私達の審美眼や空間の捉え方を自分達のものにしていくことが出来、より魅力的なキャンパスを生み出していけるのではないかと考える。

【アートステージ 37 の成果】

アートステージ 37 を通して既存の彫刻や絵画、工芸作品を、(写真、映像、そして舞台芸術の大学院生たちによるパフォーマンスも含め) 既存の空間に展示、発表しようとするその意味は一体何なのだろうか。

本来絵画や彫刻はその空間の為に考えられ(サイトスペシフィックアート)制作され、設置されるべきものである、という意見もある。(また映像や舞台の踊りやパフォーマンスは劇場、あるいはそれに類した空間で発表されるべきなのに何故大学キャンパスで発表しようとするのか。)

事実中世の建築、彫刻、絵画、そして工芸も工房という技能集団がありその工房に様々な施主からの依頼の下に成り立ってきた。あるときにはその施主が時の権力者であり、宗教等であった。しかし 18 世紀以後、産業革命に伴う市民層の勃興と貴族階級、宗教の没落などの社会構造のドラスチックな変化が起こり、いわゆる一般市民の自意識の自覚、さまざまな価値観の変

化などがおきた。それは美術の世界、そして工房にも波及した。その結果美術家が作品を自分自身のために制作し発表するという形態が徐々に形成され、それに伴ってギャラリーのそしてコレクターの出現、そのコレクターのコレクションを保管、展示する場所としての美術館の出現となった。そしていわゆる美術市場なるものが形作られてきたのだと考えられる。そして現在では様々な発表活動で頭角を現してきた作家にこの空間に作品を、と言うような制作依頼への流れになって来ているように思う。そのような制作依頼が来たときにその空間のための作品、いわゆるサイトスペシフィックな作品が作られるのだと思う。

このような認識の下、大阪芸術大学のキャンパスでアートステージのような発表活動をしようとする時、空間は当然もう出来上がっている既存の空間である。その空間に作品を展示しようとするとき二通りの考え方がある。ひとつはその空間に調和するような作品を展示しようとするものであり、もうひとつの考え方はその空間にあえて異質なものを展示することによってよりその空間を認識させ、異空間に変貌させようとする考え方である。

そのほか今回のアートステージ 37 で印象に残ったのはあっけらかんとした鮮やかな色のプラスチックによる立体作品ではなかろうか。一つは金工の大学院生による第一食堂前の水の中に展示された作品。そしてドレミ広場の水の中に浮かべられた金工副手の作品である。二人とも抽象形態を展示していた。同じ立体作品でも彫刻の人間が同じ素材であるプラスチックを使ってもあのような鮮やかな色を使っているのをあまり目にしたことがない。これは一体どういう理由なのか、彫刻と工芸の違いから生まれてくることなのか今後解明していきたい点である。

概して彫刻の人間は素材の持っている色のままで新たに色をあまり加えないように思う。塑像の作家たちがプラスチックで型取りをし、着色してもせいぜいブロンズ色に近い色付けをする程度のもが多い。

先日東京ドイツ文化会館でドイツの若い彫刻家が展覧会をしていた。彼は真鶴の小松石の石切り場に二ヶ月ほど滞在し、石切り場で見つけてきた自然が作り出した絶妙な形の石を二点展示していた。一点は自然な石の色で、もう一点はすべて真っ白に塗ってあった。白く塗ってあるほうの石からは重さがなくなり、非常に不思議な感じを受けた。そしてこの二点の対比が実にユニークで、これは日本人の発想にはないように思った。

もうひとつアートステージ 37 を通して思ったことは、キャンパス内に立体作品を展示するスペースはそれなりに見つけることは出来たが、平面作品を展示するスペースがなかなか見つけられないということである。スペースは有っても壁面がコンクリートのため作品を展示できない、というケースが多かったように思う。

このように実際にキャンパスに作品を展示するということは、作品、そしてその置かれた環境との関係のみならずその人の生活態度まで見透かされてしまうということ故に本当に怖いことでもあるということを知ってもらいたい大事なことだと思った。

最後に今回のアートステージ 37 に参加いただいた先生、副手そして大学院の学生諸君の学科を明記すると美術学科、写真学科、工芸学科（金工、染織）、舞台芸術学科、芸術計画学科、

